

学校だより：

# 岩中レポート

夏休 第2号 令和元年8月5日（月）発行 発行責任者 校長 馬場廣明

## 須賀川市「少年の主張大会」が開催されました！

### ～ 伊藤亜可梨さん(3の1)が、優秀賞に輝く！！ ～

8月1日（木）に須賀川市少年の主張大会が、民交流センターtetteで開催されました。市内中学校10校より代表生徒が参加、日頃考えていること・感じていることなどを発表し、どの生徒の内容もたいへんにすばらしかったです。本校からは伊藤亜可梨さん(3の1)が「生かされるということ」の内容で発表し、みごと優秀賞に輝きました。伊藤さんは内容もすばらしかったですが、声の大きさに強弱をつけるなど感動を与えるとても印象深い発表でした。当日は多くの方々にご観覧いただき、ありがとうございました。また、指導いただきました石井先生、当日応援に駆けつけてくれた3学年の広瀬先生、角田先生にも感謝いたします。なお、伊藤さんの文面につきましては、次ページをご覧ください。



(堂々と発表する伊藤さん)



(表彰式・優秀賞受賞！)



(先生方との記念写真)

※ 県大会参加者は、最優秀賞1名・優秀賞4名の計5名の中から1名が選出されます。どうぞお楽しみに！

## 第22回ふくしまボランティアフェスティバルで、

### 「福島県社会福祉協議会長感謝状」を受賞してきました！

8月3日（土）に第22回ふくしまボランティアフェスティバルが、パルセいいざかで開催され、学校代表で、生徒会会長の渡辺 智くん(3の2)と副会長の田邊美咲さん(3の1)、校長の3名で参加してきました。団体名が呼ばれ大きな声で「はい」と返事をしたときは、思わず会場からは大きな拍手がわき起こりました。今回の栄えある受賞は多くの先輩方が築き上げてきたすばらしいものであり、改めまして、感謝申し上げます。ありがとうございました。なお、今回の表彰式には本校職員の広瀬先生のお母さん、広瀬洋子さん(天栄村/個人受賞)も受賞されました。誠にありがとうございました。



(返事をし起立する代表生徒)



(感謝状を手に、はいポーズ！)



(広瀬先生のお母さんも受賞)

## 生かされるということ

岩瀬中学校 3年 伊藤亜可梨

災害で家族や知人を亡くし、生き残った人がこう言っていたのを、私は今でも忘れることができません。「自分はこれまで生きていたのではなく、生かされていたということに気付いた。この生かされた命、これから大切に全うしたい。」

私が以前読んだ本の中で、明日殺されると分かった子牛が、最後の夜に言ったこんな言葉があります。「牛は、植物に命を分けてもらって生かされています。だから植物に感謝し、何度もよく噛んでいただきます。そして、分けていただいた命を、今度は、必要とする者たちのために差し出すのは自然なことだと思います。しかし、人間たちは、そのことを知らないのです。そのときの気分で命を奪うことができちゃうから、必要以上の命を奪ってしまうことになるのです。」

この二つの言葉から、「生かされる」とはどういうことなのか、私なりに考えてみました。すると、共通点として見えてきた姿勢は、「感謝の心」です。私たちは、多くの人間との関わりの中で育ってきたと言えます。家族や親戚、祖先、恩師、先輩、そして友人たち。これからも私たちは、そういう周囲の人々に生かされていくはずなのです。しかし、私たちは、いつもそのことを忘れがちではありませんか。ですから、簡単に人を傷つけたり、人の命を奪ったり、あるいは自分の命を自ら絶とうとする人さえいます。自殺なんてする動物は、人間だけだとも聞いたことがあります。

「中学生、いじめを苦に自殺か。」こんなニュースを、少なくとも半年に一回ほどは見るような気がします。実際には、もっと多いのかもしれませんが。こんなニュースが流れた後は決まって、いじめは実際にあったのか、なかったのか。どこからどこまでがいじめで、この場合はいじめと言えるのか。誰が関わっていたのか。学校は何をやっていたのか。教育委員会はいじめを認めるのか認めないのか、など、責任のなすりつけ合いのようなことが始まります。そうして、亡くなった中学生がどんな気持ちで最期の時を迎えたのか、そこを深く考えることはあまりありません。きっと毎日が辛く、息をすることすら苦痛な日々だったのではないのでしょうか。だからもう、生きることから逃げざるを得なかったのだと思います。言わば何の色も持たない、絶望的に虚しい毎日。その上自分は、周囲の人々から白い目で見られ、存在すら認められていない。さらには攻撃までしてくる人も。その絶望の中にあっては、「自分の命は与えられたものなのだから、生かされた命を大切にしなければ。」などという思いは到底持てるはずがありません。

私はいつも思うのです。その人の周りには、ただの一人も自分を生かしてくれる人はいなかったのだろうか。気持ちを分かってくれる、味方になってくれる人はいなかったのだろうか。どんな人だって、少なくとも両親は、無条件でその気持ちを理解してくれるはずなのではないのでしょうか。明日殺される子牛が言っていたように、分けて頂いた命を、今度は必要な者に差し出す。これが「生かされていることに対する感謝。」ということならば、人間社会においては、周囲の人々を大切にすること、他者を認め、困っている人や辛い状況にある人に寄り添うことに他ならないのではないのでしょうか。

私は、この生かされた命に誇りを持って生きていきたい。周囲に影響力を持つ人になりたい。周囲の人々にいつも目を配り、辛いことに直面している人の気持ちに寄り添って、真心をもって手助けしたい。色のない世界に生きている人たちの人生に、色を付けてあげたい。そうして、その後自分でいろんな色を付けていける力を与えてあげたい。そうしてこう気づかせてあげたい。

「あなたは生かされている命を大切にすべきです。あなたの命は多くの人々が繋いでくれた結晶で、あなた一人だけのものではないのです。あなたの命は他の人々に生かされ、他の命を生かすために与えられているのです！」

□ 伊藤さんの文面から、皆さんはどのような感想を持たれたのでしょうか。親から授かった大切な命、生きたくても病気や不慮の事故などで命を絶たれてしまう人も数多くいます。間違っても自ら命を絶つなどということは絶対にあってはならないことです。人それぞれにいろいろな色（個性）があっていいんですよ。

※ 今回の学校だより「岩中リポート」はホームページのみに掲載し、全校生への配付はいたしません。